

# 英語結果構文と日本語結果複合動詞 における force dynamics

影 山 太 郎

## 1. 英語の派生的結果構文と日本語の結果複合動詞

英語の結果構文 (**resultative constructions**) に現れる結果述語は、主動詞そのものが含意する結果状態を描写する場合 (1) と、主動詞だけでは含意されない新たな変化状態を表す場合 (2) に大別できる。影山 (1996) では前者を本来的結果述語 (**inherent resultatives**), 後者を派生的結果述語 (**derived resultatives**) と呼び、日本語では後者が成り立たないことを指摘した。

- (1) a. **The matter froze hard and solid.** / その物質は カチカチ に凍った。  
 b. **Ken polished his car to a brilliant shine.** / ケンは車を ピカピカ に磨いた。
- (2) a. **She pounded the fish to a jelly.** / \*彼女は魚を ゼリー状 にたたいた。  
 b. **John scrubbed the dirt off his shoes.** / \*ジョンは靴から ドロ を擦った。

Talmy (2000, Vol. 2) の言語類型で “**satellite-framed language**” に該当する英語では、派生的結果述語を前置詞句や形容詞句で表現できるが、“**verb-framed language**” である日本語では英語の派生的結果構文に相当する状況を表現するには (3) のような複合動詞が必要になる。

- (3) a. 彼女は魚をゼリー状に たたきつぶした。 ((2 a) と比較)  
 b. ジョンは靴からドロを 擦り落とした。 ((2 b) と比較)

Wechsler and Noh (2001) や Boas (2003) は、英語において本来的と派生的の区別を認めず、総ての結果述語は主動詞が固有に持つ（あるいは主動詞から予測可能な）状態を表すと論じている。これは言い換えると、英語の結果構文は総て「本来的」であると主張していることになる。しかし少なくとも日本語では本来的結果述語と派生的結果述語の区別は歴然としているから、英語においても両者の区別は必要であると考えられる。

結果構文に関するこれまでの研究は、主動詞の性質、結果述語の性質、主動詞と結果述語との共起関係などに向けられ、原因事象と結果事象に関わる参与者（主語と目的語）の関係はほとんど見過ごされてきた。本稿では、Talmy (2000, Vol. 1, Ch. 7) の“**force dynamics**”の考え方を利用して、参与者間の関係を考察する。**force dynamics**（力動性；以下“**FD**”と略）とは、出来事に参与する“**Agonist**”（**AGO**, 主動体：本来的に動きや静止の傾向を持つもの、被動者）と“**Antagonist**”（**ANT**, 対抗体：主動体に対してそれに対抗する力を加えるもの、使役者）の間の相互作用を言う。例えば子供が岩を持ち上げるとき、岩はその重力によって同じ位置に留まろうとする性質を有するから **AGO** であり、その重力に対抗する力を加える子供は **ANT** である。岩が軽ければ持ち上げられるが、重ければ持ち上げられない。このように、子供が岩を持ち上げるといふ行為の成否は、**ANT** と **AGO** の相対的な力関係に依存している。

**FD** は、本来的結果構文と派生的結果構文の区別にも有用であると思われる。本来的結果構文は、**The ice cream froze hard.** や **The ice cream melted to liquid.** のように、変化対象（**AGO**）そのものの性質（影山（1996）の用語では「内在的コントロール」）に依存する変化であり、多くの場合、外的な使役主（**ANT**）がなくても成立する。**She froze the ice cream so hard.** のように他動詞文になっても、使役主（**ANT**）は **AGO** の変化を（強制ではなく）助長する意味になる。このような場合、力関係は **ANT** < **AGO** と捉えることができる。**He shot the bear dead.** のような場合、物理的には明らかに **ANT** の強制力の方が **AGO** の生命力より勝るわけだが、しかし **shoot the bear** だけでも

目的語 (AGO) が負傷ないし死亡するという結果まで含意し、この語彙的含意が AGO の FD を高めている。そのため、文全体としては ANT の力はさほど AGO を上回っていないと考えられる。すなわち、本来的結果構文における FD はせいぜい  $ANT \leq AGO$  と見なせる。

他方、**She shook him awake.** や **He sneezed the tissue off the table.** のような派生的結果構文では、AGO (目的語) は外部からの使役がなければ元の状態を保ち、ANT (主語) の強制力によって始めて AGO の状態が変化する。従って、FD は  $ANT > AGO$  である。派生的結果構文が他動詞構文を取り、**\*He shook awake.** や **\*The tissue sneezed off.** のように自動詞化 (影山 (1996) の「反使役化」) ができないのは、ANT の力が AGO の力を遙かに凌駕するためである。派生的結果述語が、実際に結果状態が発生しない場合でも誇張表現として働く (Goldberg 1995) のは、この  $ANT > AGO$  という力関係を修辭的に利用したものと捉えられる。

そこで、新しい派生的結果構文を作り出す際にも  $ANT > AGO$  という関係の成否によってその適格性が変わってくるのが予測できる。以下では、英語の派生的結果構文に対応する日本語の「結果複合動詞」を造語し、その適格性を force dynamics の観点から検討する。

## 2. 英語の派生的結果構文における force dynamics

結果構文の成立に重要なのは、①原因事象と結果事象に関わる参与者 (ANT と AGO) の繋がり、②主動詞によって表される原因事象の物理的な強さの2つである。まず①について説明する。Jackendoff (1990: 227) は、(4) では  $a > b > c$  の順で容認度が下がると指摘している。

(4) a. ?The rooster crowed the children awake.

b. ??The boxers fought their coaches into an anxious state.

c. ?\*In the movie's longest love scene, Troilus and Cressida kiss most audiences squirmy.

影山（1996： 259–260）では、原因事象と結果事象に関わる参加者の意味的な繋がり（リンク）によって、この違いを説明している。まず、英語話者なら誰でも受け入れる（5）の例では、ANT（John）がAGO（his opponent）に対して強い打撃を加え、それによってAGOは意識を失う。

(5) John knocked his opponent senseless.

[x ACT ON-y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-SENSELESS]]  
 (x=John, y=his opponent)

(5)の語彙概念構造(LCS)で、矢印はエネルギーの伝導を表す。まず原因事象においてACT ONの主語であるxがyに物理的な働きかけを行うが、このyは結果事象におけるBECOMEの主語と同一指示であり、それは更にBEの主語と同一物である。このように原因事象と結果事象に関わる項の間でエネルギーの伝導が認められることを「参加者間のリンクが成立する」と称することにしている。参加者間リンクが成立すると、結果構文が認められる。

この観点から(4 a, b, c)を見ると、(4 a)ではcrowが自動詞であるから、原因事象は[x ACT]だけのように見える。そうすると、「雄鶏が鳴く」という事象が単独で起こるだけで、「子供が目を覚ます」という結果事象との参加者リンクが成立しない。ただし、統語構造には現れないものの、LCSにおいて“(crow) at the children”（子供に向かって）のような補部を想定して、[the rooster ACT ON (あるいは TOWARD) the children] という意味で解釈するならば、結果事象と原因事象に共通の参加者(the children)が想定されることになり、(4 a)は許容可能となる。次に、(4 b)のThe boxers foughtは[x ACT ON-x] (x=the boxers)であるから、原因事象の参加者(the boxers)と結果事象の参加者(their coaches)は同一指示ではない。ただ、their coachesのtheirは主語のthe boxersを指すから、この「所有関係」において原因事象と結果事象に弱いリンクが生まれる。最後に(4 c)では、Troilus and Cressida kissという原因事象と、most audiences become squirmyという結果事象は参加者を全く共有しないから、その結果、(4 c)はほとんど受け入れられない非文となる。

参与者間リンクの重要性は、日本語の複合動詞でも指摘できる。複合動詞の前部 (V1) が自動詞のこともあるが、その場合も、ANT から AGO へ何らかの作用が及んでいる。例えば「目を泣き腫らす」では、一見したところ、AGO (目) への働きかけがないように思えるが、「泣く」という行為は「目から涙を発生させる」ということであるから、ACT の下位概念として [x EMIT TEARS FROM EYES] のような活動が想定され、発生した涙が目作用して、目が腫れるという結果が生じる。このように複雑な語彙概念構造を想定することで参与者間のリンクが結べることになる (他のパターンについては影山 (1996, 2001), 谷脇 (2000) を参照)。

派生的結果構文の適格性を支配するもう 1 つの要素は、AGO と ANT の力関係である。(6) に挙げた様々な打撃・接触動詞を比べてみよう。

(6) The soldier {knocked/struck/?hit/\*touched} the civilian dead. (Boas 2003: 137)

(6) では **knock**, **strike** は適格であるが、**hit** は容認されにくく、**touch** は排除される。この違いは明らかに、それぞれの動詞が表す打撃ないし接触の物理的な強さに対応している。**touch** のように打撃性のない行為は相手に死に至らしめることができない。**hit** が容認されにくいのは、**knock**, **strike** のような強い打撃を必ずしも伴わない (打撃様態が未指定である) からである。**hit**, **knock**, **strike** はいずれも ACT ON 型の LCS を持つが、打撃の強さや回数は ACT という述語が内包する動作様態において、例えば **beat** なら [x ACT<Manner: hard and repeatedly> ON-y] のように指定されていて、この語彙情報によって結果構文の成否が決まると考えられる。動詞が固有に持つ性質が重要であることは日本語の複合動詞にも見られる。

(7) 大関が横綱を {突き倒した/押し倒した/張り倒した/(ちよんと) ?\*突っつき倒した/\*さわり倒した/\*\*触れ倒した}。

以下では、FD の考え方が妥当であることを証明するために、日本語で語彙化されていない複合動詞を造語してその適格性を日本語話者に調査した結果を報告する。

### 3. 新造複合動詞の調査

日本語では動詞+動詞型の複合動詞の形成において動詞の自他による形態的な制約が働いている。その制約を影山（1993, 1996, 1999）では（8）のように一般化している。

#### （8）他動性調和の原則（Transitivity Harmony Principle）

語彙的な V-V 型複合動詞では同じタイプの項構造を持つ動詞同士が複合できる。

- a. 他動詞：(x < y)
- b. 非能格自動詞：(x < )
- c. 非対格自動詞：< y

（8）で「同じタイプの項構造」というのは外項を持つか否かを指す。外項（x）を持つ他動詞と非能格自動詞は相互に複合することが可能であるが、外項を欠く非対格自動詞の複合相手は非対格自動詞に限られ、他動詞および非能格自動詞との複合はできない。

さて、英語の結果構文は SVOC 構文であるから、それに対応する日本語複合動詞は主要部（V2）が他動詞の場合に限られる。すると、可能性としては次の3つの型が想定できる。

- （9）A. 他動詞+他動詞（他動性調和に従う）：押しつぶす
- B. 非能格自動詞+他動詞（他動性調和に従う）：（目を）泣き腫らす
- C. 非対格自動詞+他動詞（他動性調和に反する）：\*（針金を）折れ曲げる

（9C）は他動性調和の原則に反するから、意味を考える前に既に形態的に排除される。他動性調和に合致するのは（9A）と（9B）で、この2つの型は、見たことも聞いたこともない新造語であっても、形態的には可能なパターンであるから許容する話者がいることが予想される。

仮説：日本語の複合動詞と英語の結果構文は、形成過程が異なるものの、出

来上がった表現の意味解釈が概念構造において決定されるという点で共通している。英語の派生的結果構文の適格性は、原因事象と結果事象の **FD** によって決定されるから、日本語で新しい結果複合動詞が作られた場合も、その解釈の適格性は同様の意味的条件によって決定されると予測できる。

**実験**：上の仮説が正しいことを検証するために、辞書に載っておらず、また実際にこれまで聞いたことのない複合動詞を造語し、それが日本語として許容できるかどうかを日本語話者に尋ねた。被験者は関西学院大学の3年生100名で、英語の結果構文について勉強しているが、日本語については言語学的な分析を行った経験のない人たちがばかりである。行った実験は、新造の複合動詞を含む例文と、それが用いられるコンテキストを被験者に示し、「日本語として可能かどうか」を判断してもらうという形をとった。

#### 被験者に対する説明

示された状況において、下線を引いた複合語は日本語として受け入れられますか？どの複合語も実在しないものなので、正しいか間違いかではなく、日本語として「あり得る (possible)」かどうかで判断してください。

1. 日本語として自然に受け入れられる。
2. よく分からないが、まあ、受け入れられる。
3. 日本語として受け入れられない。
4. 判断できない。なんとも言えない。

例：[状況] 犬が吠えて、その声で子供が起きた。

犬が子供を吠え起こした。(1 2 3 4)

集計にあたっては「1. 日本語として自然に受け入れられる」と「2. まあ、受け入れられる」の2つを「容認できる」ものとして分類した。今回の調査で用いられた複合動詞はもともと日本語に実在しない表現であるから、実験結果の整理においては「3. 日本語として受け入れられない」と「4. 判断できない」は考慮に入れなかった。

結果：実験結果は、ほぼ予想通りだった。新造の複合動詞は形態的な条件（他動性調和の原則）によって最も厳しく制限され、次に、他動性調和に適合するものは、行為連鎖における FD に左右されることが判明した。以下に具体例を提示する。

**パターン A：他動詞+他動詞——ほとんど許容される**

まず、他動詞と他動詞の複合は大多数の被験者によって容認された。このパターンは他動性調和の原則によって形態的に認可されるだけでなく、V1とV2の主語同士、目的語同士が同一物を指し、参与者間リンクが繋がるからFDによっても許容される確率が高い。以下では各例文のあとに、「容認可」と答えた被験者の割合を数字で示す。

(10) a. [状況] パイ生地を上から手で押して、平たく延ばした。

パイ生地を平たく押し延ばした。(95%)

b. [状況] 夜中に、お母さんが「○○ちゃん」と名前を呼んで、寝ている弟を起こした。

夜中に母が寝ている弟を呼び起こした。(89%)

(10 a) より (10 b) のほうが幾分許容度が下がるのは、「押す」という行為と「名前を呼ぶ」という行為の物理的な作用の強さの違いに依ると考えられる。

**パターン C：非対格動詞+他動詞——ほとんど許容されない**

V1 非対格動詞+V2 他動詞の組み合わせは他動性調和によって形態的に排除されるパターンであり、実際、新造語の実験においても許容する話者はほとんど皆無だった。

(11) a. [状況] 火事が起こって、大切な書類を燃やしてしまった。

\*\* 火事が大切な書類を起こり焼いた。(0%)

b. [状況] 怪物が現れたので、子供たちはちりぢりに逃げていった。

\*\* 怪物が子供たちを現れ散らした。(0%)

c. [状況] 雷が鳴り響いて、寝ていた子供は目を覚ました。



\* 雷の音が寝ていた子供を響き起こした。(7%)

- d. [状況] 夜中に電話のベルが鳴ったので、寝ていた子供が起きてしまった。

\* 夜中の電話のベルが寝ていた子供を鳴り起こした。(9%)

- e. [状況] 彼は階段で転んで、足をいためた。

\* 彼は足を転びいためた。(13%)

(11 a) の V1 「起こる」と (11 b) の V1 「現れる」は発生・出現を表し、影山 (1996) で提案した LCS のモードによると、BECOME の主語を欠く構造 (BECOME [y BECOME AT-z]) である。行為 (ACT) → 変化 (BECOME) → 状態 (BE) という行為連鎖において中間部 (BECOME) に主語が存在しないから、原因事象から結果事象への参与者間リンクが繋がらない。そのために、(11 a) (11 b) は許容する話者がゼロということになる。これに対して (11 c, d, e) では、V1 が「響く、鳴る、転ぶ」という変化動詞であるから BECOME の主語が想定でき、その結果、原因事象から結果事象へリンクが繋がなくもない。形態的な制約から逸脱しているのに (11 c, d, e) を許容する話者が若干いるのは、形態的な逸脱を意味解釈の強制 (coercion) で補正 (repair) しているためであると見なされる。(11 e) の許容度が相対的に高いのは、ANT (彼) と AGO (足) が分離不可能所有関係にあるため、ANT が AGO の変化を引き起こしやすいからである。もし ANT と AGO が意味的に関係のない場合は、(12) のように全く容認できない文になる。

(12) \*\*彼はそばにあった家具を転びいためた。

ここで重要なことは、(11) に相当する結果構文は英語でも認められないことである。

(13) a. \*A big earthquake occurred all the buildings apart.

b. \*A monster appeared the children away.

生成文法では、(13) のような例の非文法性は、格フィルター (Case filter) によって説明されてきた。すなわち、非対格動詞の occur や appear は目的語に対格を与えることができず、そのために the buildings, the children が格

を持たないことになり、非文となる。しかしながら、この説明は (11) の日本語には通用しない。(11) では **V2** が他動詞であるから、目的語に対格を与えることができる。実際、(11) の例で、動詞を **V2** の他動詞だけに変えると文法的になる。

(14) 火事が大切な書類を焼いた。／雷の音が寝ていた子供を起こした。

このことから、英語 (13) と日本語 (11) の共通性を捉えるためには、統語的な格ではなく、本稿で述べているような意味的な考え方が必要となる。

これに関連して、**Rappaport Hovav and Levin (2001: 790–791)** が指摘する (15) と (16) の微妙な容認性の違いを見てみよう。

(15) a.??**The ball bounced the markings off the floor.**

b.??**The wagon rolled the rubber off its wheels.**

(16) a. \***The ice melted the floor clean.**

b. \***The water evaporated the pot dry.**

**Rappaport Hovav and Levin (2001: 791)** によれば、(16) と比べると (15) は多少許容されると判断する話者がいる。(15) の動詞も (16) の動詞も非対格であるから、格だけでは両者の容認度の差が説明できない。ところが、主語 (ANT) と目的語 (AGO) の物理的な関わりを見ると、(15) は (17) のように使役文で言い換えることができるが、(16) はそのような言い換えができない。

(17) a. **The (bouncing) ball caused the markings to get off the floor.**

(=15 a)

b. **The (rolling) wagon caused the rubber to get off its wheels.**

(=15 b)

(18) a. \***The (melting) ice caused the floor to become clean.** (≠16 a)

b. \***The (evaporating) water caused the pot to become dry.** (≠16 b)

このことから、(15) では ANT (**the ball, the wagon**) が AGO (**the markings, the rubber**) に直接的に作用するという解釈が強制されて、意味的な補

正が起きていると見なすことができる。

**パターン B：非能格自動詞＋他動詞——容認度は **force dynamics** に依存**

上記 2 つのパターンでは容認性の判断がかなり明瞭に下されたのに対し、「非能格自動詞＋他動詞」のパターンは話者間で大きな変動が見られた。この変動は他動性調和だけでは説明がつかない。他動性調和の原則によれば、非能格自動詞＋他動詞の組み合わせは他動詞＋他動詞の組み合わせと同じく、日本語として適格な複合語を提供するはずである。しかしながら、新造語をテストしてみると、話者間にかかなりの揺れが観察された。このことは、対応する英語の結果構文（主動詞が非能格動詞）において話者間で容認性のばらつきがあることと相関している。すなわち、行為を非能格動詞で表現する場合は、日英語ともに、何らかの同じ制限が働いているということである。

具体的な例を見てみよう。まず、ANT のエネルギーが AGO より際立って大きい場合は、新造複合動詞が高い容認度を示す。

- (19) a. [状況] 父が、「いつまで寝てるんだ！」と大声でどなって、弟を起こした。  
父が弟をどなり起こした。(83%)
- b. [状況] 突風が吹いて、家の窓ガラスが割れた。  
突風が家の窓ガラスを吹き割った。(63%)
- c. [状況] 彼はその車を乗り回しているので、車のタイヤが去年一年間で 5 組もダメになった。  
彼は、去年一年間で、5 組のタイヤを乗りつぶした。(59%)
- d. [状況] 応援団のひとが大声で叫びすぎて、のどをつぶした。  
応援団のひとが、のどを叫びつぶした。(51%)
- e. [状況] 陸上競技の選手が激しい練習をしたので、履いていた靴が 1 日でダメになってしまった。  
陸上競技の選手が、履いていた靴を 1 日で走りつぶした。(50%)
- f. [状況] 太った人が帽子の上に座ったので、帽子がベシャンコにな

った。

太った人が帽子をペシャンコに座りつぶした。(38%)

g. [状況] 歌手が練習で歌いすぎて、のどをからした。

歌手が、のどを歌いからした。(34%)

h. [状況] 暴走車が電柱にぶつかって、電柱が倒れた。

暴走車が、電柱をぶつかり倒した。(19%)

i. [状況] 水泳選手が激しい練習を繰り返したので、着ていた水着がボロボロに破れてしまった。

水泳選手は、激しい練習で、着ていた水着をボロボロに泳ぎ破った。(5%)

(19 a, b) は原因事象において ANT から AGO に対する働きかけ (ACT ON) が想定されるから、比較的許容度が高い。(19 c, d, g) でも、「車」と「車のタイヤ」、「歌手」と「歌手ののど」というように所有関係で参与者間リンクが成り立つ。これらが比較的高い許容度を持つのは、ANT の力が AGO の力を遙かに上回っていて、その為に使役関係が成立しやすいからである。

これに対して、(19 h) の許容度はあまり高くない。「ぶつかる」という動詞は [x ACT ON-y] という働きかけの構造を持ち、また、暴走車が電柱にぶつかる時のエネルギーは龐大であるから——すくなくとも「叫ぶ、走る、歌う」などより遙かに大きいから——結果複合動詞が高い許容度を得てもよさそうなものである。従って、(19 h) の低い許容度は単純な働きかけ構造と ANT のエネルギーだけでは説明がつかない。そこで、ANT (暴走車) に対する AGO (電柱) の抵抗力を考えると、電柱は地面にしっかりと固定されているから、ぶつかってくる暴走車に対して相当な抵抗力を持っている。(19 h) の許容度が小さいのは、派生的結果構文に必要な ANT > AGO という関係が素直に成立しにくいためではないかと考えられる。最後の (19 i) 「泳ぎ破る」は、(19 e) 「靴を走りつぶす」と比較すると分かりやすい。

(20) a. x が走るという行為 → 地面 (ANT) → 履いている運動靴 (AGO)

b. x が泳ぐという行為 → 水 (ANT) → 着ている水着 (AGO)

運動靴で走るとき、運動靴が地面を蹴るから、そのエネルギーが反動となって靴が影響を受ける。地面と靴の関係は、地面が **ANT**、運動靴が **AGO** と見なせる。地面は物理的な固さの故に、反動エネルギーは大きく、**AGO** である運動靴（の底）に大きく作用する。他方、泳いでいるときの水は、地面のような反動エネルギーを着者に与えない。この違いによって、「走りつぶす」と「泳ぎ破る」の容認度の差が生じる。筆者のインフォーマントによると、英語でも？ *\*She swam her swimsuit to tatters.* は、*He ran his shoes ragged.* と比べて許容度が低い。

ここで注意したいのは、原因事象が意図的な行為（**21 a**）のほうが、偶発的な出来事（**21 b**）より容認されやすいということである。

(**21 a**). [状況] 賢い犬が火事に気がつき、一所懸命に吠えて、寝ている主人を起こした。(意図的)

賢い犬が、火事を知らせるために、寝ている主人を吠え起こした。(31%)

**b**. [状況] 遠くで野良犬が吠えたために、寝ていた子供が起きた。(非意図的)

遠くの野良犬が、寝ていた子供を吠え起こした。(12%)

興味深いことに、筆者のインフォーマントによると、同じ違いが英語にも観察される。

(**22 a**). **The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.**

**b. \*A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.**  
(\* for my informant)

意図的な場合が適格になる理由は、1 つには、**The dog barked at his master.** のように働きかけの対象が想定できるため参与者間リンクが繋がるということと、もう 1 つには、意図的であることで **ANT** のエネルギーがそれだけ強くなるということが考えられる。

#### 4. 語用論的知識とのインターフェイスとしての概念構造

本稿では、結果構文における *force dynamics* が主動詞および結果述語（複合動詞なら V 1 と V 2）の語彙的な性質と、参与者（ANT と AGO）の性質によって決まることを見た。これに関連して、Boas（2003）は次のような違いを指摘している。

(23) Rachel sneezed {the napkin/?the book/\*the beer case} off the table.

(Boas 2003 : 271)

(24) {Mary/?The baby/\*The mouse} sneezed the napkin off the table.

(Boas 2003 : 272)

(23) (24) では、ANT と AGO の名詞を変化させることによって容認性の違いが生じている。このことから Boas（2003 : 272）は “*pragmatically induced contextual background information*” が重要であると結論づけている。しかしながら、(23) (24) の容認性はあくまで主動詞 *sneeze* と結果述語 *off the table* の LCS が土台となっていることに注意しなければならない。もし *sneeze* を、動作様態の異なる類義動詞に取り替えたなら結果は違ってくるはずである。従って、結果構文の基礎として重要なのは主動詞と結果述語の LCS であり、それを骨組みとして具体的な主語と目的語を組み込んだ概念構造 (*Conceptual Structure*) において結果構文全体の容認性が判断される。この段階では、主語・目的語として用いられた名詞の特質構造が利用でき、また、概念構造は言語外の認知機構とのインターフェイス (Jackendoff 1997) であるから、結局、結果構文の解釈は用いられる語彙の意味に基づいて決定されるということになる。

#### 参考文献

- Boas, Hans. 2003. *A Constructional Approach to Resultatives*. CSLI Publications.  
Goldberg, Adele. 1995. *Constructions*. University of Chicago Press.  
Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.

- Jackendoff, Ray. 1997. *The Architecture of the Language Faculty*. MIT Press.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版.
- 影山太郎. 1999. 『形態論と意味』くろしお出版.
- 影山太郎. 2001. 「日本語から英語学理論への発信」『月刊言語』30/2: 39-47
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. An event structure account of English resultatives. *Language* 77: 766-797.
- Talmy, Leonard. 2000. *Towards a Cognitive Semantics* (2 volumes). MIT Press.
- 谷脇康子. 2000. 「結果構文の目的語——構成役割と類推規則による導入」『人文論究』50/2・3: 125-138.
- Wechsler, Stephen and Bokyoung Noh. 2001. On resultative predicates and clauses. *Language Sciences* 23: 391-423.

本稿は、平成15年度文部科学省科学研究費（基盤研究（B）（1）課題番号14310225）に基づく研究の一環で、2003年9月にHarvard大学で行った招待講演の一部分をまとめたものである。実験の詳細およびその理論的意味合いについては稿を改めて論述したい。

——文学部教授——